

などからは見出したことがないとのことであった。

末筆ながらこの珍しい種の分布を御教示下さり、さらに日野氏の報文を教えていただきコピーまでして下さった永幡嘉之氏に厚く御礼を申し上げる。

ユリクビナガハムシの採集例

永 幡 嘉 之

ユリクビナガハムシ *Lilioceris merdigera* (LINNÉ) はあまりその名を知られていないが、鮮紅色の美しいハムシである。私は小学生の頃(1980年頃)から、アカクビナガハムシによく似た別種がいることに気付いていた。その後追加記録も出、また県内では篠山町での1例しか記録がないことも分かり、今回三木市内での本種の記録を報告したい。

<採集例>

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 三木市口吉川町善祥寺。 | 1♂、1♀。5—V—1984、永幡嘉之。 |
| 三木市口吉川町大島。 | 1 ex., 19—VI—1988、稻見 誠。 |
| 三木市口吉川町大島。 | 1 ex., 26—VI—1988、稻見 誠 |
| 三木市口吉川町大島。 | 10exs., 10—VII—1988、稻見 誠 |
| 三木市口吉川町大島。 | 1 ex., 30—IV—1989、稻見 誠 |
| 三木市口吉川町大島。 | 1 ex., 10—VII—1989、稻見 誠 |
| 三木市本町。 | 1 ex., 24—V—1989、永幡嘉之 |

さて、三木市内の本種について考える上で最も重要なのはその食草である。大島ではオニユリとのことで、善祥寺、大島でもオニユリかコオニユリのどちらかにはいた。だが、当時はムカゴの有無にまで注意を払わなかったのでどちらか分らない。ただ、善祥寺では丈は低いながらもムカゴはついていたように記憶している。とにかく、オニユリ類であることは間違いなく、その種類の確認が今後の第一の課題である。

生息環境は、本町では山裾の畑地、大島では庭園内、善祥寺でも山裾の庭内であった。いずれの地もかなり自然度の高い所である。

次に、オニユリとコオニユリが三木市内にも自生しているかしていないのかということ調べてみ

た。部分的には自生かと思わせるような生え方をしているものもあるにはあるが、民家のすぐ近くである。また、紅谷(1971)や多くの図鑑類を見ても、コオニユリは山地性、オニユリは帰化種とのことで、三木市内に自生のものがあるとは考えにくい。人家の庭によく植えられる種であることと併せて、市内で林縁部などに生えているものは、付近の民家から拡がったものであると考えられる。

するとにわかには大きな問題が浮かび上がってくる。すなわち、土着か帰化かという問題である。様々な仮説は立てられるが、これを論ずるのはもっと記録が増え、県内での産出状況がいくらか明るみに出てからでも遅くはないと思う。私自身の経験を通して見ても、この種が絶対数の少ない珍品であるとは思えない。ただ、生息している環境が、やや自然度の高い庭園や畑という、普通の調査では見落しがちな盲点であるが故に、気付かれずにきたのであろう。確かに、野外の調査では目にふれにくい種ではある。

佐賀県では本種が輸出ユリ栽培地検査の際発見されたとある。その時、食草としてクロジクテッポウユリとアオジクテッポウユリの2種が報告されている。²⁾

今後、庭園のオニユリ類にはぜひ注意をはらっていただきたい。アカクビナガハムシをひとまわり小さくし、脚を赤くして、背面もいっそう鮮やかな赤にしたようなハムシがいたら、本種である。大島では4～8月に見られたというが、これは善祥寺での私自身の経験ともよく一致する。ユリの葉先を後食し、葉上で交尾中のものもよく見られた。捕えると赤い汁を出す。

末筆となりましたが、本稿を書く上でいろいろお世話になりました高橋寿郎氏、ユリの分布について御教示いただいた兵庫教育大学の山田卓三教授、そして市内での本種の記録並びに知見を教えてくださいました稲見誠氏、西田雅昭氏に厚くお礼申し上げます。

(25. Feb. 1990)

<参考文献>

- 1) 高橋寿郎(1981)、兵庫県のクビナガハムシ。てんとうむし(7):10—14。
- 2) 日野隆之(1961)、ユリクソハムシの生態。採集と飼育 23(1):22—23。